

平成十九年七月一日発行 第十七巻第七号 通巻第一九二号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成19年7月号



朧

高橋将夫

一つだけ回つて  
みない風車  
草餅の届くあひだは  
母元氣  
天国と地獄を見たる  
恋の猫  
かの世まで持つてゆく  
恋つくしんぼ

朧から返つてきたる木霊かな  
朧から戻つてこないブーメラン  
一匙の朧を隠し味とせり  
石礫おぼろの芯に当りたる  
空いてゐるところへ椿落ちにけり  
帯を解くやうに渦潮消えにけり  
大田螺鳴けど手応へなかりけり

# 西 方

水野恒彦

春曉のむらさき櫃の木がうかび  
蜃気楼人の来てまた人の去り  
万の花びら吹雪きて暗き漢かな  
昼すこし眠りて遠方の山ざくら  
春愁の行き止まりなり尾骶骨  
亀鳴くと人語さびしきものなりき  
酔昆布をしゃぶりて春の途中なり  
酔余して何か足らざる四月尽  
太宰忌の梵字こぼるる沙羅落花  
螺髪にもにはかな風の五月闇

## 特別作品

真上ふとおのが虚空に梅雨の月  
万緑や顛頂ずんずん沈みくる  
金佛を離れて来たり冷し瓜  
走馬灯追ひつけぬもの追ひつづけ  
西方のそこひに鳴けり法師蟬  
はつ雁にすこし違ひし夢二つ  
すすきかるかや見えざるものが通り過ぐ  
播州のふふみて大き桃の種  
冬の鴟朱蠟燭が燃えてゐる  
佛手柑や握り返してこられける

# 槐安集

水野恒彦

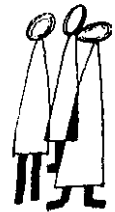
夢ばかりみて夢忘る雪解かな  
灌仏やみだらなこゑの鳥のゐて  
鶴引いて女ののんど動きけり  
ことだまの國なる田螺鳴けるかな  
郎女をこころに野火の遠かりき

延広禎一

石臼ごろり岩塩さらり春うらら  
出雲より黄泉に入りける花筏  
鉛切の音弾けたり雪解晴  
ヨイトマケ櫻隠しの夜明けかな  
山吹の一重に触るる加藤みき

祝「おたけ」上梓

櫻葉くし踏屋「月影」巻、題後三行



加藤みき

大人たいじんはやはり大人青嵐  
青麦あおむぎや次第にかろき足になり  
美麗しき人麗人の友にの毛糸の春帽子  
連翹れんせうの垣の根方のうすら闇  
牡丹や月影のゆき渡りたる

石脇みはる

ざれごとの恐さに変はるさくらかな  
花冷や遊び田に足踏み入れて  
大天狗置かれありけり花の雨  
春の雁時なし大根洗ひをり  
麦の穂の青吹く風とゐたりけり

中島陽華

目借時奥日光に払ふ塵  
春の風遍照金剛ひたすらに  
櫻茶を所望したるは太閤か  
漆盆剥げかけ喜寿の櫻鯛  
絃切れの琵琶なほ弾じ花の山

竹内悦子

耳聴くをり三月の森の中  
朱い茸白い茸や涅槃西風  
石佛に五百の顔や土佐水木  
緑蔭に坐つてをれば大日も  
賛美歌をうたふ卯の花腐しかな

栗栖恵通子

初蝶やてのひらかゆくなりける  
九穴に鍵なき春の夜なりけり  
怒る海笑へる山も郷里のもの  
余花残花生人形の首化粧  
百千鳥魚梯に泡ありにけり

大島翠木

利休忌やダム湖に強き紺どよむ  
早蕨の山てふいのちこみあぐる  
黒人霊歌花冷えの夜となりけり  
フランスコに水や八十八夜寒  
口づけは春のシネマのまた逢ふ日

雨村敏子

ふたつとは素数のはじめ藁ゆる  
恐竜の化石出でたり花の山  
身のうちに坤のありけり陽炎へる  
幻日や花にかの世のありにける  
銀色に恆河の波や櫻東風

小形さとる

その辺に坐れと種を選りながら  
さつきから臀いしきくすぐる涅槃西風  
野遊びの太いけむりの方へ行く  
口元の臍たけしこと彼岸河豚  
眉掃草一度も会はぬままなりし

本多俊子

太陽の燃ゆる音あるわらびかな  
帆柱に一匹の蜂進みをり  
木下闇太子の耳たぶにふれる  
わが影を蜥蜴よぎりて行きにけり  
草蜉蝣いのちの色透けるなり

天野きく江

花ふぶき鬼の玉梓かもしれず  
尾の描く仮の世に○春の牛  
葱坊主山程捨てて行くをとこ  
雉子鳴くや流浪の旅装解きをり  
日の本の牧歌八十八夜かな



# 槐市集

犬塚芳子

花満開雲中供養菩薩かな  
太陽と象春昼に對峙せり  
さくらさくらそぞろに赤い靴ゆけり  
生家には凭るる柱春の昼  
野ねずみのいでて八十八夜寒

井上静子

台秤の針振れ止まず花の昼  
花の気を前頭葉にもらひたる  
薫風の懐入るる万歩計  
すましたる生簀の中の菜種河豚  
始発待つ氣の昂ぶりや青葉風

岩下芳子

桜大樹抱きし山の雲動く  
好日や百魚の中の桜鯛  
齒朶若葉寺へ八丁七曲り  
夜の月初時鳥啼きにけり  
花筏ときどき鯉の大き口

岩月優美子

遙かより父の声する春の山  
蝌蚪の水氣儘なる刻過ごしをり  
青麦の風のさざ波虚空かな  
湧き水の音の高まり四月尽  
行春の大樹の洞を覗きをり



# 槐集

## 高橋将夫選

霊場も太平洋も黄沙かな  
枚方 近藤きくえ

投網打つ瞬時に春の光打つ  
潮騒のゆりかごなりし花の冷  
ライオンの春日を吸ひし大欠伸  
百千鳥御堂に日差しやはらかき  
ふくらみし闇より明くる日の永し  
白雲の動かぬ重さ桜餅  
身の洞に降りこむ桜吹雪かな  
鶯や女人高野の磴杳く  
ふかぶかと女人を容るる塔臚  
春眠や時空ひと飛びしてきたる  
受胎せし果樹の眩しさ虻の昼  
リラ冷や神さぶ星の立つてきし  
ピーナツを割りぬ二佛となる臚  
何かが守る丸見えの鴉の巢

中野 京子

近藤 喜子

養花天人は脱皮をしたきもの  
枚方 近藤 公子

雨やみて苔の花咲く石の相  
花の寺現代彫刻展覧会  
薫風に手足の鎖はづれたる  
墓鳴くや広目天はたぢるがす  
花吹雪生れては消ゆるニンフかな  
岡崎 岩月優美子  
手鏡の中に取りける春愁ひ  
笑ふ山地球儀軽く回リたる  
のれそれの点の眼や遠霞  
のれそれ 六子の稚魚  
一本のペン晩春の虚構かな  
柳絮とぶ龍馬通りや酒の蔵  
春雨の庭の明るし般若面  
大寺の萱まぶしき百千鳥  
鈍色に柱の光るさくらかな  
風いでて琴きき茶屋の桜餅

枚方 谷村 幸子

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

霊場も太平洋も黄沙かな 近藤きくえ  
黄沙は日本海を越えて太平洋にも達するというが、霊場にまで  
思いをはせたところが眼目。俳諧。ところで大陸の砂漠化と土  
壤汚染は黄沙にも大きな影響を与えるようになってきた。いつ  
の世もうれうべきことは多い。

ふかぶかと女人を容るる塔隴 中野 京子  
塔とあるから、どこかの霊場なのだろう。その鹿の奥へ奥へと  
女人が入って行く。どんどん隴の世界が広がっていくようだ。  
女人高野といわれる室生寺が思い浮かぶ。

受胎せし果樹の眩しさ虻の昼 近藤 喜子  
花が誕生し、鳥や昆虫が誕生して地球は一挙に華やかになっ  
たというのが進化の歴史。今、咲き乱れていた花は受粉し、新  
しい生命を宿した。作者にとつては果樹が特に輝いて見えたと  
いう。わかる気がする。そんな春の昼であるが、蝶ではなく虻  
の昼であるところに俳諧味がある。

養花天人は脱皮をしたきもの 近藤 公子  
養花天は花曇。養うには白黒のはつきりしない方がよいのか  
もしれない。人は時に自分変えてみたい、殻を破ってみたいと  
思う。そんなふう（カタチ）に思うのは、ひよつとしたら養花天のせいな  
のかもしれない

花吹雪生れては消ゆるニソフかな 岩月優美子  
花吹雪の中に妖精を見ている。和洋融合の世界。

柳絮とぶ龍馬通りの酒蔵。硬軟融合の景。 谷村 幸子  
柳絮のとぶ龍馬通りの酒蔵。硬軟融合の景。

園児らのこゑ幾筋も風光る 竹中 一花  
春の光と風の中に飛び交う元気な園児の声が今にも聞えてき  
そう。

マツハ6射程の外の春銀河 瀬川 公馨  
冬の銀河に対して朧な感じの春の銀河。そこへ突然超音速の  
飛行物体が登場して度肝を抜かれる。春銀河も俳句もマツハ6  
のミサイルのとどかない世界か。

前生まへうに会ひにゆきたる蜷の道 西村 純太  
私に前世が有っても、その記憶がなければ、私ではないと思う。  
それはともかく、前世に行くのに蜷の道を通るというからすこ  
い。なるほど、蜷の道は前世に通じているような気がしてきた。

手力男と天鈿女と春の地震 中田 禎子  
天の岩屋戸の前で天鈿女命（あまのうずめのみこと）が踊り、  
天手力男命（あまのたちからおのみこと）が岩屋戸を開いた神  
話を知らない人はないだろう。しかし、そんな手力男や天鈿女  
をもつても地震ばかりは如何ともしがたいだろう。

（以下略）